特集「環境」によせて

南川高志

「環境」は、いまや人類が直面する最重要課題と言って過言でない。地球温暖化や環境破壊に対して、世界中の国々の間で、国際的な協議や対策が講じられつつある。もちろん「環境」は、人類全体の政治的・国際的問題として取り上げられる以前に、人々の毎日の生活に密着した問題である。琵琶湖畔に暮らしている私などは、湖の水質保全に絡む「環境」の話題を毎日のように耳にする。想えば、大学の学部や学科などの名前に「環境」の二文字を見かけるようになってすでに久しい。

史学研究会が関わる学問分野では、改めていうまでもなく地理学が早くから研究上「環境」と密接な関係を有してきたし、歴史学・考古学でも、環境史や環境考古学といった学問分野がすでに確立している。しかし、歴史学全般を眺めれば、地理学ほど正面から「環境」を研究の論点として取り上げてきたとはいえないかもしれない。もちろん、優れた実績はいくつもあろう。例えば、本会元理事長でギリシア史家の藤縄謙三教授の論文は、その一つといえよう。藤縄教授は、一九八二年に「古代ギリシアにおける自然の荒廃の問題」という長大な論文を発表している（『西洋古典学研究』第三〇巻）。この論文の中で教授は、古くは緑豊かな大地であったギリシアが、今日では大部分が荒涼たる岩山の目立つ風景になってしまった理由を、ギリシア人が海での戦いのために森林を伐採して驚くほど多くの船を作ったことなどを史料を渉猟しつつ説得的に説明する。そして、緑が失われ荒野となったギリシアの環境が、太古以来信仰されてきた異教から人々が離れて、茨を象徴とする苦悩の宗教キリスト教を受容するようになった、まさにその心性を生み出したことを明らかにしているのである。ただ、この論文のような試みは、今日の西洋古代史研究でも稀といわねばならない

二〇〇八年度の史学研究会の例会で、共通論題として「環境」を取り上げることになったのは、歴史学、地理学、考古学の研究者がこの「環境」を共同で論じたならば、一般社会にむけても影響力を持つような意義深い「環境」認識が得られると同時に、それぞれの研究分野でも新たな発見や展開が生まれるのではないか、との期待からであった。京都大学文学研究科の関係専修教員に例会の研究報告者候補推薦を依頼し、五名の報告者と三名のコメンテーターを決定して、御準備いただいた。その際、「環境」とは一般に「自然環境」という意味で捉えられやすいが、例会のテーマとしてはこの意味に限ることなく、それぞれの研究分野で広く捉えていただくようにお願いした。

その結果、皆さんの御尽力で、平成二〇年（二〇〇八年）四月一九日に開催の史学研究会例会は、一〇〇名を越える参加者を得、内容的にもすこぶる有意義なものとなった。本号は、この例会での研究報告を踏まえて執筆いただいた論文を核とするものである。本号論説のうち、日本史の橋本道範氏（滋賀県立琵琶湖博物館）と井黒忍氏（日本学術振興会）の論文は、例会第一部「環境を生きる—水と生業の歴史」でお話しいただいたものを基とする。北村昌史氏（大阪市立大学）、水野祥子氏（九州産業大学）、祖田亮次氏（北海道大学）の論文は、例会の第二部「環境を変える—住環境と自然環境をめぐる施策と思考」において話していただいた報告を踏まえたものである。例会の第三部では考古学の松井章氏（奈良文化財研究所）、西南アジア史学の川本正知氏（奈良産業大学）、そして現代史学の鶴見太郎氏（早稲田大学）にコメントをいただいて討論をおこなったが、鶴見氏には御自身の研究の立場から「環境」に注目した御論文を本号に寄せていただいた。

本号には、以上の六編の論文だけでなく、中国古代史専攻の吉本道雅氏（京都大学）から環境考古学に関わる研究動向を、ドイツ宗教改革専攻の永田諒一氏（岡山大学）からヨーロッパ近世の「小氷期」をめぐる研究動向を寄稿いただいた。こうして、本号は、専門分野の違いを越えてぜひ読んでいただきたい雄編八編を掲載することができた。さらに、歴史学・地理学・考古学の「環境」に関わる研究活動の広がりを知っていただくために、本号は四編の書評と一編の紹介文も掲載している。

環境破壊や環境保護といった今真っ盛りのテーマを単純に過去に遡らせ、歴史学研究のトピックとして考察することは、時代錯誤の批判を招くかもしれない。しかし、「環境」をそれぞれの時代のコンテクストにはずれることなく、また現代への筋道に慎重に絡めてゆくならば、他の研究分野、さらには一般社会にむけても有効な研究成果があげられよう。

本号に掲載された論説には、個々の分野に即して眺めると、従来の有力説を痛切に批判するものやわが国で初めての史料を使って実証研究するもの、問題の議論のあり方の基礎を作ろうとするもの、そして問題の輪郭をわかりやすく解説するものなど、多様である。しかし、本号を手にとってくださった読者には、各論説・研究動向が個々に論じるテーマや論点だけでなく、数編の論説・研究動向、そして書評・紹介にも通じるような、共通する論点を発見していただけると嬉しく思う。そして、歴史学、地理学、考古学が共通して論じることができる「環境」にかかわる論点は何か、また共通しては扱えない論点、あるいは学問の違いによって明らかに異なる「環境」への対応は何かなど、研究法や史料の性格、議論のあり方についても、問題を発見していただきたい。そうすることで、「環境」だけでなく、自身が関わる専門領域の学問的性格についても、改めて理解が深まるように思われるからである。

よろしく御検討願います。

（二〇〇九年一月）

（史学研究会編集担当常務理事　京都大学大学院文学研究科教授）